友人關係と対人的知覺の研究（1）

小　川　一　夫

（昭和33年11月10日受理）

Ⅰ 問　　題

友人関係について組織的に研究が進められるようになつたのは，Moreno, J. L. らによるソシオメトリー運動以来といつてよい(1)。集団構造に関する多くの知識がソシオメトリック・テストによつて求められたが，また別に集団内の選択行動がいかなる理由でなされるかについても種々究明されてきた。この場合最も多くとられてきたのは，特定の相手を選択する理由を選択者自身に直接尋ねる方法であり，その結果成員間の地理的・物理的距離や，性格特性などが選択行動を規定する要因として取上げられてきた(2)(3)。

しかしかかる記述統計的な追求の仕方からは，選択者が意識している限りの選択動機を捕捉することはできても，さらに進んで現実の友人関係を複雑に規定している諸条件を力動的に解明することはできない。選択行動を力動的に把握してゆこうと思えば，それが集団という一つの場の中で行われる以上，認知過程を媒介として成立する成員間の相互作用と理解し，社会的場における知覚を問題視し究明してゆかねばならない。最近選択行動について認知的側面の重要性が強調され，social perception あるいは sociometric perception の語を用いて選択行動と対人的知覚の研究が次々と進められるようになつたのも当然のことである (4) (5) (6)。

社会的場における友人の知覚について，Northway, M. L. and Detweiler, J. は「我々は人を実在としてみるのでなく，我々との関係においてみる」ということ，即ち他人の知覚様式は相手が知覚者に対して持つ価値に依存するという考えのもとに，友人と非友人の知覚の相違を種々の人格特性に関して実証している(7)。彼等が取上げた人格特性は，寛大（generous），明朗快活（cheerful），礼儀（polite）．信頼感（dependable），協調性（cooperative），慎重（considerate），運動（good sport），親切（friendly），正直（honest），ユーモア（humorous）の10項目であり，それぞれの項目の他人についての評定を同じ項目の自己評定と比較し，「自分の友人は自己よりも望ましい人格特性を持つと知覚するが，逆に非友人は自分よりすぐれた特性を持たないと知覚する」と結論づけている。

本研究では，Northway らの試みたものとほぼ同じ手続きで選択行動と対人的知覚の関係を追試し，友人選択に作用する条件を究明することを目的とするものである。

Ⅱ 研究の手続き

ソシオメトリック・テストで決定された各自の友人及び関心をよせない人（非友人）について，種々の人格特性の5段階評定をさせる。そこから自分の友人を自己評定より高く，または低く評定した度数と，自分の非友人を自己評定より高く，または低く評定した度数とを集計し，両

者の間に差異があるかどうかを検討してゆくのが研究の主な計画である。

1. 被 験 者

松江市立女子高校1年生の1クラス57名。このうち43名のものを資料の分析に用いた。

2. 調 査 期 日

昭和32年12月。したがつて学級が編成されてから少なくとも8ケ月は経過しており，その間彼女らは同級生として生活を共にしてきたものである。

3. 方 法

(1) 3つの規準（criteria）からなるソシオメトリック・テストを実施する。その3つの選択規準とは，休憩時間を一緒にすごす場合，家庭科の共同学習を一緒にする場合，日曜日に一緒に映画に行く場合であり，人数を制限しないで好きな人をあげさせるようにした。

(2) 評定尺度は次のように設定された。まず1年生の半数に，(イ) 人間のもつよい特性や能力を17の用語で挙げ，立派な人間になるためにはこの中のどれが大切であると思うかを問い，そのうち特に5項目にチェックさせた。あとの半数の生徒には，(ロ) 立派な人間になるにはどのような性格や能力を身につけたらよいと思うかと質問し，自由記述の様式で解答させた。

この結果主要なものとして，「責任感が強い」「明朗快活である」「信頼がおける」「正義感が強い」「親切である」「積極的である」「正直である」「忍耐強い」「真面目である」「礼儀正しい」の10の人格特性がまとめられたが，追試的研究の性質上，Northway らが使用した特性でここに挙げられなかつた「運動ができる」「ユーモアに富む」「慎重である」「協調性がある」「寛大である」の5つを加え，合せて15の人格特性を好ましいものから好ましくないものへ5点尺度に構成する。

(3) ソシオメトリック・テストの資料は普通の方法で整理し，各自が最も高く選択する2名をその生徒の友人と決めた。なおこの手続きの過程において次の諸点に留意した。(イ) まず3つの選択規準を通じて選択される者をさがす。(ロ) それでなお2名に満たない場合は，2つの規準を通じて選択される者をも加えてゆく。(ハ) しかも以上の操作は，決定される友人がなるべく級中に広く分散するよう，即ち友人が特定の者に集中しないよう努める。

この結果，クラスの57名中48名の者が少なくとも一度は誰かの友人として抽出されるようになり，友人として決定されることの最も多い場合でも4回を越さないようとりきめられた。なおかかる2名の友人決定が可能であつたのは43名についてであり，これが今後の分析に資料として用いられる。

また各生徒がソシオメトリック・テストで全然あげなかつた者7名を，その生徒の関心をよせない者（非友人）とする。この決定に際して特に配意した点は次のようである。(イ) さきに少なくとも一度は誰かの友人として抽出された48名にことごとく及ぶよう，且つそれ以外に出ないようにする。(ロ) 友人の決定の場合と同様に，特定の生徒に重複しないようできる限り分散をはかる。(ハ) 同時に，各人のさきに決定された2名の友人の社会的地位の範囲内において，しかもその社会的地位の平均値が等しくなるよう非友人の7名を抽出決定する。

以上の操作の結果，非友人のとりきめは友人としてさきに決定された48名の全てに及び，その抽出される頻度は1人が5～10回となつた。

(4) 各人に11枚の評定用紙を配布する。第1枚目と第11枚目には自分の名前が，第2～第4枚目と第6～第9枚目には自分が関心をよせない人（非友人）の名前が，第5枚目と第10枚目には自分が最も高く選択する友人の名前が記してある。そしてこの用紙の順に記名してある者について人格特性の評定を行わせる。従つて各生徒の評定する相手はそれぞれ異るわけであるが，要するに自己（2回），2人の友人，及び7人の非友人を15の人格特性について5段階に品等づけさせるわけである。我々が特に自己評定を2回試みさせたのは，それによつて評定の信頼度を検討しようとする意図に発するものである。

Ⅲ 結果および考察

1. 自己評定について

資料の整理，分析に当つては，どの段階にチェックしたかの絶対的な評定を問題にするのでなく，自己についての評定を規準にして，それより高く評定しているか，同じであるか，低く評定しているかを当該生徒の友人及び非友人について検討してゆく。

従つて，まず整理の規準になる自分についての評定がどのようになされたかをみると，第1表の如く第1回目（第1枚目）も第2回目（第11枚目）も「慎重」と「積極性」を除き，他はことごとく段階3より上位に自己を品等づける者が多い。平均品等段階でいえば，第1回が0.31であるのに対して第2回は0.34を示し，間に挿んだ他人の評定作業後の自己評定が多少とも変動しているわけである。その変動の状況をとりまとめれば，第2表の如く殆んどの者が変動しないで，約¼の者が僅かに（1たまは2段階）ずれを示すにすぎない。試みに同一対象が僅かの時間経過に従つて，その自己評定にどの程度の変動をするものであるかを各特性

第1表　自己評定の各品等段階頻数

特性＼段階	第1回 5	4	3	2	1	計	第2回 5	4	3	2	1	計
寛大	1	9	27	6		43	1	13	23	6		43
明朗快活	2	19	22			43	3	19	21			43
礼儀	1	12	28	1	1	43	2	11	29	1		43
信頼感		11	29	3		43		11	30	2		43
協調性	4	12	26	1		43	4	11	26	2		43
慎重		5	29	9		43		5	32	6		43
運動	3	9	24	7		43	3	10	24	6		43
親切		20	23			43	2	20	21			43
正直	5	20	17	1		43	4	20	19			43
ユーモア	2	19	17	5		43	1	19	21	2		43
責任感	3	20	18	2		43	3	17	21	2		43
正義感	6	11	25	1		43	5	12	25	1		43
積極性		6	23	13	1	43		7	26	10		43
忍耐力	2	12	22	7		43	1	12	26	4		43
真面目		16	25	2		43	3	11	26	3		43
計	29	201	355	58	2	645	32	198	370	45		645

第2表
自己評定の変動状況

変動段階値	頻数
0	487
1	148
2	10
3	0
4	0
計	645

についてみれば，第3表に示すような相関係数を求めることができた。

第3表
自己評定の信頼度

人格特性	信頼度係数
寛　大	0.70
明朗快活	0.85
礼　儀	0.62
信頼感	0.71
協調性	0.49
慎　重	0.64
運　動	0.81
親　切	0.71
正　直	0.68
ユーモア	0.70
責任感	0.64
正義感	0.81
積極性	0.77
忍耐力	0.52
真面目	0.67
計	0.70

これらの相関係数はいずれも1％以下の危険率で有意に正に相関があり，従つて自己評定が極めて高い信頼度を有することを意味するものである。しかし2回にわたる自己評定は殆んど同時に行われたものであることを考えるならば，必ずしも数字の示す信頼度の高さをそのまま許容してよいか疑わしい。やはり生徒の一部には，ここで用いた人格諸特性について，自信にみちた自己評定をしかねている者のあることを充分念頭において資料の考察を続けてゆく必要があると思う。

2. 友人および非友人の評定について

二回行われた自己評定のうち，第一回目のものを規準として，他の生徒（組合せによつて決定された友人2名及び非友人7名）を自己より高く評定しているか，同じに評定しているか，低い方へ評定しているかを分析し，その度数を友人と非友人の別に集計すれば第4表の如くまとめられた。なお参考のために Northway らが行つた10の人格特性についての結果をも左欄に添えておきたい。

Northway らの研究にあつては，10の人格特性のうち9つまで友人と非友人の間に5％以下の危険率で有意な差がみられ，総計の平均においてもそれが認められた。しかし我々の追試的研究では15の人格特性のうち，「明朗快活」「信頼感」「親切」の三項目についてのみ有意な差を認めることができ，あえて10％以下の危険率まで範囲を拡げるにしても，「協調性」と「ユーモア」を加えうるにすぎない。

我々の研究にみられるずれが，いかなる条件によつて起つたかを明確に断定することは極めて困難ではあるけれども，一応次の諸点が反省的に指摘される。即ちまず考えねばならないことは，評定それ自体にどれ程の信頼がおけるかの問題である。さきに考察した自己評定においてすら，殆んど同時に行つてもなお全てが完全に一致するわけではなかつた。とするならば，他の者についての人格特性の評定はおそらくそれ以上に信頼がおけないのではないかと懸念される。

次に問題視されるのは友人と非友人の組合せの決定方法についてである。友人はソシオメトリック・テストの結果から極めて高く選択されるもの2名を決定するのであるから，何ら疑問の余地はないけれども，7名の非友人は一度も選択されなかつた極めて広い範囲の中からの抽出であるだけに，それらを一概に関心をよせない人（非友人）として同じ対人的意味に解してよいであろうか。ソシオメトリック・テストで好意的選択こそしなかつたが多少ともそれに近いもの，むしろ反発的な関係にあるもの，そのどちらでもなく完全に無関心なものなど，種々相異なる人間関係にある者が混然と非友人の中に含まれてくる恐れがある。この点から考えて，

第4表　友人と非友人についての自己評定との比較

人格特性	事例	Higher	Same	Lower	計	X^2	有意水準
寛大	友人 2	32	22	10	64	9.36	P<0.01
	非友人 7	66	88	70	224		
明朗快活	友人 2	24	26	14	64	10.07	P<0.01
	非友人 7	47	87	90	224		
礼儀	友人 2	32	17	15	64	18.40	P<0.001
	非友人 7	62	86	76	224		
信頼感	友人 2	29	21	14	64	9.94	P<0.01
	非友人 7	63	68	93	224		
協調性	友人 2	26	26	12	64	9.03	P<0.02
	非友人 7	72	65	87	224		
慎重	友人 2	30	21	13	64	6.46	P<0.05
	非友人 7	69	82	73	224		
運動	友人 2	27	28	9	64	7.58	P<0.05
	非友人 7	65	92	67	224		
親切	友人 2	16	30	18	64	13.33	P<0.001
	非友人 7	25	85	114	224		
正直	友人 2	23	30	11	64	13.17	P<0.01
	非友人 7	61	88	75	224		
ユーモア	友人 2	27	23	14	64	4.08	0.10<P<0.20
	非友人 7	75	70	79	224		
平均	友人	26.2	24.4	13.0		7.37	P<0.05
	非友人	60.5	81.1	82.4			

人格特性	事例	Higher	Same	Lower	計	X^2	有意水準
寛大	友人 2	27	45	14	86		
	非友人 7	80	170	51	301		
明朗快活	友人 2	25	46	15	86	11.35	P<0.01
	非友人 7	72	119	110	301		
礼儀	友人 2	20	50	16	86		
	非友人 7	57	169	75	301		
信頼感	友人 2	32	46	8	86	16.62	P<0.01
	非友人 7	54	185	62	301		
協調性	友人 2	21	50	15	86	5.15	0.05<P<0.10
	非友人 7	71	142	88	301		
慎重	友人 2	34	47	5	86		
	非友人 7	106	169	26	301		
運動	友人 2	30	33	23	86		
	非友人 7	89	128	84	301		
親切	友人 2	27	47	12	86	14.30	P<0.01
	非友人 7	50	159	92	301		
正直	友人 2	10	56	20	86	3.94	0.10<P<0.20
	非友人 7	40	161	100	301		
ユーモア	友人 2	19	48	19	86	4.92	0.05<P<0.10
	非友人 7	68	132	101	301		
責任感	友人 2	15	45	26	86		
	非友人 7	51	134	116	301		
正義感	友人 2	11	50	24	85*		
	非友人 7	47	151	103	301		
積極性	友人 2	34	41	11	86	2.03	0.30<P<0.50
	非友人 7	129	120	52	301		
忍耐力	友人 2	20	44	22	86		
	非友人 7	94	134	73	301		
真面目	友人 2	24	50	12	86		
	非友人 7	75	178	48	301		
平均	友人	23.3	46.6	16.1		2.03	0.30<P<0.50
	非友人	72.2	150.1	78.7			

* 正義感の計が1不足するのは無記入が1あつたためである。

集団の成員全てに相互評定をさせるとか，反発関係の面をもソシオメトリック・テストで調べて非友人の限界を明確にしてゆくなどの必要性を痛感する。

さらに被験者の年令的・学年的相違も反省される。共に女生徒を対象にしたとはいえ，Northway らは中学1年生に実施しているのに対して，我々は高校1年生について調査を行つた。発達段階に応ずる社会的知覚の変動については後程の研究にその解明をまたねばならない。

しかしそれにも拘らず，「明朗快活」「信頼感」「親切」あるいは「協調性」「ユーモア」などの特性では，自分の友人を自己よりも高く評定し，自分があまり関心をよせない者をより低く評定する傾向を我々の研究で明白に認めることができた。従つて，この限りにおいて，人は自分の友人と非友人とを別々に評定していると結論づけられる。換言するならば，その人が自分といかなる関係にあるかという社会的関係において人をみるのであり，自分の友人は自分より一層明朗快活であり，信頼がおけ，親切であり，協調性があり，ユーモアに富んでいると知覚していることが分る。

3. 補償的関係について

我々の研究の被験者が明らかに青年期の生徒であることから考えて，自己の特に劣ると思う人格特性に関しては，特にその特性のすぐれていると思う相手との結合を強く求める，いわば補償的な人間関係がみられるのではないかとも推測される。そこでさきに規準として用いてきた自己評定が段階値2以下の者のみを抽出し，友人と非友人についての評定を比較的にまとめるならば第5表のようになる。そもそも自己評定の段階値2以下の者が少ないためかも知れないが，この分析からは，特に自分が劣ると考える人格特性の面でそれのすぐれた者との結合を強く求めるような補償的な関係をうかがうことができない。

第5表　自己評定段階値2以下の者についての自己評定との比較

人格特性	該当者数		Higher	Same	Lower	計
寛大	6	友人	11	1		12
		非友人	32	9	1	42
礼儀	2	友人	4			4
		非友人	14			14
信頼感	3	友人	5	1		6
		非友人	21			21
協調性	1	友人	2			2
		非友人	7			7
慎重	9	友人	16	2		18
		非友人	56	7		63
運動	7	友人	11	3		14
		非友人	39	10		49
正直	1	友人	2			2
		非友人	7			7
ユーモア	5	友人	9	1		10
		非友人	27	8		35
責任感	2	友人	4			4
		非友人	8	6		14
正義感	1	友人	1	1		2
		非友人	4	3		7
積極性	14	友人	22	6		28
		非友人	77	21		98
忍耐力	7	友人	10	4		14
		非友人	45	4		49
真面目	2	友人	4			4
		非友人	10	4		14
計	60	友人	101	19	1	120
		非友人	347	72	0	420

Ⅳ 要　　約

集団内における友人選択の動機について，被験者に直接選択の理由を尋ね，その結果を分類記述してゆく従来の方法からは，力動的な人間関係を規定する条件を充分に解明することはできない。従つて選択行動に関連をもつ対人的知覚の究明が特に強調されるようになり，North-

way らは自己評定を規準として，友人に対する知覚と非友人に対する知覚とを比べ，明らかに自分よりすぐれた人格特性の所有者として友人を知覚していることを実証した。我々は女子高校生を対象に，人数無制限のソンオメトリック・テストを施行し，その社会的地位がほぼ等しくなるよう各人に2名の友人及び7名の非友人をとりきめ，15項目の人格特性について5段階の品等づけを追試的に実施した。その結果次のようなことが明らかになつた。

(1) 15の人格特性についての自己評定は平均値的にやや上位に傾く。

(2) 2回試行した自己評定の相関からみられた評定の信頼度はかなり高い。しかしそれが殆んど同時に行われたことから考えれば，少数の者に多少の変動のあることはそれが自己評定であるだけに注目しなければならない。

(3) 自己評定を規準にして友人と非友人に関する評定を比較してみると，明朗快活，信頼感，親切，あるいは協調性，ユーモアの諸特性において評定に差のあることを見出しえた。それらの特性については，自己より高く友人を評定し，非友人をより低く知覚しているわけで，それらの特性は選択行動を規定する要因と考えられる。

(4) しかし，友人を自分よりすぐれた者と知覚し，非友人を劣る特性の所有者と知覚する傾向を，Northway らの如く多くの特性にわたつて確認することはできなかつた。これには評定の信頼度が低いこと，広範囲から数名の非友人を抽出する関係で，その中に好意的関係に近い者や反発的関係にある者などが同時に含まれる危険性のあること，対象の発達段階にずれのあることなどが起因するかと思う。しかしその解明は今後に残される。

(5) 特に劣ると自己評定する特性の場合，その特性のすぐれた者との結合を求める補償的関係があるのではないかと推測したが，この関係は捕捉することができなかつた。

本調査については対象校である松江市立女子高校の諸先生，教官上田順一，学生大原順子の諸氏に種々協力願つたことを記し，深く謝意を表する。

文　　献

(1) Moreno, J. L. : Who shall survive?
(2) 田中熊次郎：学級社会に於ける結合と分離，児童心理，第1巻，第6号，1947，23——29.
(3) 田中熊次郎：交友関係の発達的考察，児童心理，第3巻，第8号，1949，35——45.
(4) Tagiuri, R. and Petrullo, L. (eds.) : Person perception and interpersonal behavior. 1958.
(5) 大橋　正夫：選択行動と対人的知覚の研究（I），心理学研究，第27巻，第1号，1956，36——45.
(6) 大橋　正夫：選択行動と対人的知覚の研究（II），心理学研究，第27巻，第3号，1956，193——203.
(7) Northway, M. L. and Detweiler, J. : Ghildren's perception of friends and non-friends. Sociometry, Vol. 18, 527——531.